ー特集ー 九州山地、伝統の息吹ー。

九州山地から広がる伝統文化

九州山地の自然とともに育まれてきた『神楽』は、地域の誇りであり、受け継がれる祈りそのものです。悠久の時を超え、世代から世代へと伝承されるその技と心には、人々の絆と未来への想いが込められています。

1月31日に開催された「九州山地神楽祭り」では、町内で活動する神楽団体の舞が会場を包み込みました。

熱気あふれる祭りの様子、伝統を受け継ぐ人々の情熱を探ります。

今回の特集を通じて、地域文化の真髄に触れてみてください。

新たな世界との出会いを創る

蘇陽中学校1年

坂本　葵さん

―白石神楽との出会い

葵さんが神楽と出会ったのは、小学1年生の時のことです。「白石神楽」を知るきっかけとなったのは、母親と共に神楽を見学した際の経験でした。その場所には、復活した神楽の毎年のポスターが張り出されており、葵さんにとってそれが強く印象に残ったといいます。

葵さんのお母さまが幼少の頃、地域の神楽は一度途絶えていました。その後、神楽が再興されたことを知り、家族で見学に訪れたといいます。「幼少期には神楽がなく、それが復活したと聞いて見学に行きました。その時、復活後のポスターが並んでいたのが印象的で、興味を持ったようです」とお母さまは語ります。

この見学がきっかけとなり、葵さんは2歳上の兄と共に神楽を始める決意を固めます。

―神楽に打ち込む

神楽を始めて約6年。自身の成長に合わせて、舞を進化させてきました。「最初は場神楽※から始め、小学5年生からは地神楽。そして中学生になった今は、花神楽に挑戦しています。それぞれの動作、足取りや扇子の使い方も違う部分に舞の難しさを感じます」。日々、神楽に向きあいながら、それを乗り越えた時の喜びが、心に強く根付いているようです。

『四人鞭』が特に好きな演目。物語の終盤、太鼓の速度が徐々に速くなります。その瞬間に自分も舞っている中で気持ちが高ぶるのが、とても楽しいです」。

これまで経験してきた成功と失敗の中で、得た教訓があると話します。「団体の方々に『失敗しても挑戦することが大事』と教えていただき、そのおかげで、落ち込むことも少なくなり、失敗を成長の糧だと思えるようになりました」。

―魅力とこれからの展望

「神楽を舞うこと、観客の方々が喜んでくれる瞬間、それに、団体の方とのコミュニケーションが神楽の魅力」。さらに、「神楽は見ている人の心を引き込む力がある」とその魅力を強調します。「世界観に入り込めるところ、演目を通じて観客の方々と特別な世界を共有できるところも好きです」。

神楽の展望について「神楽には地域の歴史と伝統が詰まっています。将来は、自分が持っている技術や知識を、さらに下の世代に繋いでいき、多くの人に、神楽の魅力を知ってもらいたい。そして、神楽自体に触れてみる価値があるものだということを広めたいと思います」。

葵さんが語った「神楽の価値」は、今の社会にはない新しい世界を教えてくれる力。それは舞う人にも、見る人にも、新たな可能性を届けてくれるものです。

※「地神楽」「場神楽」「花神楽」「四人鞭」は、それぞれ三十三番で構成される演目の一つ。